

[学会記録]

北海道医療大学歯学会第35回学術大会 定例講演会

“開拓使で麦酒を創った男”

中川清兵衛伝

エビスビール記念館館長
端田 晶

日本人として初めてビールの本場ドイツで醸造の修業に励んだのは、長岡市与板に生まれた中川清兵衛でした。嘉永元年、中川清兵衛は与板藩の御用商人扇屋の一族に生まれました。海外への憧れが強く、十六歳で家出して横浜でドイツ商館住込みのボーイになりました。そして慶応元年四月、一般の海外渡航はまだ国禁なのに英国に密航しました。しかし英国では成功できず、ドイツに渡ります。そこで青木周蔵にめぐりあい、ビール工場への就職を斡旋してもらいます。中川清兵衛は必死にビール醸造を学び、二年後には一人前と認められます。中川はドイツ公使出世していた青木を訪問し、開拓使の長官である黒田清隆に推薦してもらいました。

黒田は殖産興業に熱心でビール事業にも関心が高く、部下の村橋久成に担当させます。中川は村橋の下で技術関連の一切を任せられました。こうして日本人による初のビール工場建設が始まりました。明治九年に札幌で工場が完成します。翌年六月にビールは完成しました。七月に函館でビールを外国船に試験販売したところ大好評。これが認められ、明治十年九月に東京で「札幌冷製麦酒」が発売され、美味しいと評判になりました。

明治十四年、黒田は開拓使の運営にかかる莫大な事業経費に悩み、資産を五代友厚に売り払って、事業の民営化を目論みます。しかし売却価格が安過ぎると問題視され、政争に発展しました。その結果、翌年に開拓使は廃

止となります。そして明治十九年、麦酒醸造所は道庁から大倉喜八郎に売却され、渋沢栄一らも参加して札幌麦酒会社となります。

明治二十年、北海道庁からドイツ人技師ポールマンが送り込まれ、最新技術で中川の地位を奪います。中川は札幌麦酒を退社し、小樽に旅館を開業しました。そこで海運関係者から利尻島の苦難を聴き、義侠心に火が点きました。中川は私財を投じて利尻島の港湾整備に乗り出しましたが、しかし成果は出ず、中川は膨大な借金を抱え、旅館は人手に渡ってしまいます。その後の中川は横浜に住み、最晩年は名古屋の長男の下で過ごしました。大正五年に逝去。末期の水は本人の希望通り札幌麦酒でした。

明治初期の偉人たちには「国や社会に貢献したい」という思いがありました。江戸期までの「家の存続」優先という道德観は、維新後に「国や社会の存続」に代わります。欧米列強から日本を守る必要が生じたからです。西洋の個人主義が輸入され、個人の生きがいが模索される中で「国や社会への貢献」は明解な目標となりました。さらに西洋文明を学べば、大小さまざまな分野で実際に個人が国や社会に貢献できました。中川清兵衛は、こうした時代の精神に沿って行動した典型的な人物です。